

こころの風景

その二

富永厚



長崎市へは戦後も四回ほど行っているから、街の見当もだいたいのところは飲み込んでいるつもりだった。しかしこんどは、なにしろ九州が初めての娘と一緒だったので、手っとり早く観光バスで市内を見物することにした。

あいにく明け方から降り出した雨が、次第に大降りになって、長崎駅前からでたバスの最初の見物先の稲佐山では、ロープ・ウェイで頂上まであがってみても、全く視界がきかず、眼下に横たわっているはずの港も町並みも、横殴りの雨の灰色の縦縞模様のカーテンに邪魔されて、なにも見えはしなかった。わずかに山頂近くの斜面に点在している山桜が、雨に煙って、すこし色のさめた花を潤ませていた。

雨のなかわざわざ山の上まであがる物好きが他にいるはずもなく、ぼく等観光バスの一行で全山貸し切りといった状態だった。けっこう雨足も風に加勢されて強く、ホテルで買い込んだビニール製の傘では、身を防ぎきれず、下半身ははやくもずぶ濡れになった。

つぎはいよいよ平和記念公園で、道すがらガイドは、一九四五年八月九日の原爆惨禍の次第を語り始めた。午前十一時二分浦上空でブルトニウム原子爆弾が炸裂、八万ないし十万という市民が殺され、多数の負傷者、原爆症被害者が生みだされた。そのなかには、まだ年若い中学生や小学生、あるいは幼児・乳児もたくさん含まれていた。長崎の原爆資料館にも確か二度ばかり来た記憶がある。あらためて被爆直後の惨状を写した写真を見て、そのひどさに胸が痛んだ。とりわけ爆心地に近い浦上天主堂の、無残に崩れ落ちた礼拝堂の入り口に立つ熱線で焦げたマリア像は、人間の償い難い悪と罪とを訴えかけているようで、背筋が凍るような気持ちを覚えないではられない。

もうひとつ釘づけになった一枚のパネルがあった。それは被曝当時十歳だった萩野美智子というひとの書いた文章だった。(原文のまま、引用させていたたく)

《妹が家の下敷になって泣き狂っていた。——ハりはびくともしなかった。——水兵さんも「だめだ」と言って……行ってしまった。》

向こうから矢のように走ってくる人が目についた。……女のからだ。はだからしい。むらさき色の体……「あっ、おかアちゃん」……もうこれで大丈夫と思つた。

隣のおじさんが力んでみたがハりは動かない。「あきらめんば……仕方なな……」申し訳なさそうに……向うへ行ってしまった。

火が燃え上って来た。お母さんの顔が真青に変わった。お母さんは妹を見おろしていた。妹の小さい目も下から見上げていた。

お母さんはズーと目を動かしてハリーを見渡した。ハリーの一ヶ所に右肩をあてた。

「ウウウ……」全身に力をこめた。パリパリ……妹の足がはずれた。

お母さんは、そのままヘタヘタと腰をおろしてしまった。

お母さんはお昼のナスを畑でもいでいたときバクダンにやられたのでした。髪の毛は

赤く短くちぢれて切れていた。体じゅうの皮はジュルジュルになっていた。

さつきハリをかついだ右肩は皮がペロリとはげ肉があらわれ、赤い血がしきりに

でていた。

やがて・・・お母さんは苦しみはじめもだえもだえてその夜死にしました。》

読みすすむうちに目頭に涙がたまり、文字がにじんでしまつて、一気に読み通すことはできなかった。この全身焼けたたれた母親のように、苦しみながら声もなく、息絶えていった数えきれないほどの多くの犠牲者のことを思うと、痛ましさに胸がうずく。

ぼくは三十五年ほどまえ、広島に行ったとき、ある被爆者の女性から、直接聞いた話しを思い出した。そのひとは、当時「ニコヨン」と呼ばれた日雇労働をしながら、二人の子供を育てていた。ご主人は徴用先の工場で、原爆の犠牲となり、行方知れずのままだという。

そのひとはまだ三十半ばぐらいしかつたが、一種の癌である白血病の前兆ともいえる慢性の貧血症におかされていて、ひどく痩せ顔色が土け色をしていたので、ずっと年とつて見えた。たいていは道路工事の手伝いをしてはいるのだが、ひとより疲れの出るのがはやく、体が錘りのようにだるくなつてきて、立っていることができず、座りこんでしまうことがよくあるという。別に怠けて一息ついている訳ではないのだが、事情を知らないひとから、またサボッていると、非難されるのが、とても辛いということだった。

原爆のピカドンが落ちたときは、戸外で家事をしていたところだった。なにが起こつたのかわけも分からず、ともかく火事から逃れようと、幼児の手をとつて、郊外へと無我夢中で歩いて行った。途中たくさんの死骸が道を埋めていた。なかには、まだ息のこつているひともいて、さかんに水をほしがっていた。とても構つては

いられず、目をつぶり、こころを鬼にして通りすぎるほかなかつた。

ずいぶんながいあいだ歩いて、ふとガラス戸が割れずのこつている家のまえに立つて、そこに映っている人影をみたとき、幽霊かなにかのようで、すぐには自分とは分からなかつた。黒焦げの上着の袖の先にのびている腕の端に、だらりと下がつているものがある。目をガラスのほうから、自分自身に移して、手先を視ると、腕の皮膚がペロリと剥がれ、むけて、先に垂れ下がっていたのだ。それまで痛ささえ忘れて、子供を助けようと一心に歩きつづけていたのだ。

「でも、生きていて良かったのかどうか、分からなくなるときがあんです」と、そのひとは泣きじゃくりながら、ぼくに語つた。あるとき、うえの女の子が通つている小学校のすぐ近くで、道路工事をやっていた。放課後、三々五々子供達が校門

からでてきた。そのなかに娘の姿を見つけて、思わず声を掛けた。娘は振り返り、ちらっと母親の顔を見たりきり、まったくの他人のように知らん顔をして、足早に立ち去って行ってしまった。

母親はひどいショックを受け、体中の力が抜けてしまったという。「なぜあのこは、あんな冷たい目で、わたしを見て、そのままにもいわずに、脇を通りすぎてしまったのか、どうしてなのか、いまでもわたしには分かりません」。母親の目から涙があふれだし、声を胸の奥から絞りだすようにして、嗚咽に暮れていた。ぼくはそれを聞きながら、言葉もなく、唇をかたく閉じたまま、ただ黙って目のまえの虚空を見詰めていた。ぼくは原爆を呪い、戦争を呪った。

母親もどんなに辛かったか分からない。だが、おそらくはその女の子も、母親と同じくらいか、あるいはもっとそれ以上に辛かったに違いないと、ぼくは思った。母親は、顔にも腕にも、ひきつったケロイドが一面に残っていて、最初の印象は無残としか言いようのない状態だった。

ぼくは男だから、小学校五、六年の女の子の気持ちだが、それほどよく分かる訳ではないが、きっとその子は、同級生たちにひどい焼けどの母を知られなくなかったであろう。泥まみれのニコヨンの母が厭だったのでもなく、美しい母、すくなくとも人並みの姿の母であって欲しかったのではないだろうか。ましてその子は、母親が嫌いなのではなく、愛していたに違いないし、その母の人一倍の苦勞を察していたに違いないのだ。

原爆は死んだものだけでなく、生き残ったもののうえにも、その悪魔の爪跡を、深く深く遺している。いわば癒し難い傷が、ひとびとのところと体にいつまでも焼きついていて、どんなに時間がたっても、それはけっして消えることがないであろう。

四

今度の旅行には三つの目的があった。ひさしぶりで父方の先祖の墓参りをする。父が生まれ、育った郷里を娘に見せ、生まれたときには、すでに亡くなっていたため、縁の薄いひとりの祖父を知るなにかのよすがを、娘自身に見つけだして欲しかったこと。そして最後のひとつは、心障者の施設で暮らしているぼくの姉を訪ねることだった。

じつはこの精神薄弱の姉にも、娘は一度も会ったことがないので、六十を過ぎ、すっかり歯がぬけて、一見人間というよりは、類人猿に近いとさえもいったほうがよい容姿の姉を見て、どんな気がするか、多少心配だった。しかし、娘は一見神経質そうではあるが、案外根あかで、適応性があり、物おじしな質なので、いくぶんはショックを覚えるにしても、分かってくれるものと、僕は信じていた。

予定の時間に少し遅れて着くと、小柄の姉が転がるように、玄関に走り出てきた。

ゆうべからほとんど眠らないで待っていたのだと、施設の先生が告げた。「お兄さん、よくおいでなさいました」。そう言いながら、姉はびよこんと頭を下げた。ぼく自身は二年まえ、あるテレビ局の後援を得て、施設の一行が東京へやってきたとき会っていたので、姉の様子はある程度まで分かっていた。ぼくが八人きょうだいの一番末っ子だから、当然年下なのだが、いつのころからか、姉はぼくを見だと思いきよんでいるみたいなのだ。

きょうだいが元気であるかとの質問に、いちいち答えながら、自給自足を旨として、周囲の畑で野菜をつくり、鶏を飼い、卵を採って生活している姉たちの、日に焼け、血色の良い、つやつやした顔を眺めていると、空気の悪い東京の暮らしよりも、ずっとこちらのほうが健康的で、姉がぼくらきょうだい中でもっとも永生きずるに違いないと思った。姉は高齢であることと、比較的からだがよくもあつて、農作業のさいには、豆を鞘からとりだすとかいった手先を使う楽な仕事を分担していたようだった。ひまなときには、日の当たる縁側に腰掛けて、母からこどものころに教わった歌をうたっていたそうだ。「ふるさと」などの歌詞もおどろくほど正確に覚えていたという。

以前だったら、だれよりも先に安否を尋ねたはずの父のことは、今回はなにもいわなかった。実際には父はもう死んでから、二十七、八年になるが、ついこないだまでそれを姉には秘していた。父の存在は、姉にとつてだれも代わることのできない、最大最強の保護者であり、精神の支柱でもあることが、みなに分かっていたので、きょうだいのだれひとりとして、父の死を姉に告げる気がしなかったのだ。

姉のほうも、ひさしく父が訪ねてもこず、手紙も届かないので、うすうす変だと感じてはいたようだが、あえて詮索したり、あれこれ子細を尋ねることもしなかった。ほんとうは、事実を知るのが恐ろしかったのだと思う。しかし、ともかくも、父の住んでいる東京に行きたい、そしてできることなら健在な父に会いたい、それが姉の悲願でもあり、最後の希望でもあったことは確かだ。

二年まえの春、突然姉がみんなで東京へ行こうと申し込んだ。そしてその提案が、施設の先生や関係者の尽力で、秋に実現されることになった。付き添いの先生がたや父兄をふくめ、総勢三十名ほどの大集団が、新幹線で上京してきた。その際、在京のほくのきょうだいがみな集まって、姉を囲み、ひさしぶりにぎやかに話した。

姉の一番の望みが父に会うことにあり、それが適わなるときには、正確な情報をつかみ、もやもやした不安に決着をつけたいと思っているに違いないこと、その切なる想いが、だれにもひしひしと伝わってきた。そこで、この際ほんとうのことを、包み隠さず、話してしまおうということになった。

ひとしきり互いの近況などのべあった後で、七十を越した長姉が、父の死を告げ

た。見る見る姉の目から、涙があふれだし、ぼたぼたと床に流れ落ちた。そして小刻みに肩をふるわせながら、低い、小さな声で姉は泣きつづけた。それはほんとうに静かな、静かな泣きかただった。どんなに悲しかっただろう。どんなに辛かっただろう。

ふつうのひとつだったら、激しく大声をあげ、身をよじって泣き叫ぶところであろう。しかし、姉の声や体の動きは、じつにおとなしかった。でも、そのころのなかの悲しさは、だれよりも深く、だれよりも大きいに違いないと、ぼくは思った。その頬をつたわる二筋の透明の涙を、なによりも純粹で美しいと、感じないではいられなかった。

姉がお世話になっている施設は、クリスチャンの一家と何人ものボランティアの人々の、献身的努力と善意によってささえられている。しかし最近では次第に規模が縮小され、面倒をみていただいている心障者の数も減ってきている。そのなかに、姉の次に年かきの四十過ぎの女性がいる。

そのひとは絵を描くのが好きで、畑仕事のないときには、ひがな一日ノートにクレヨン画を書いている。十冊以上のノートを見せてくれた。どの画面にもかならず自分が書きこまれている。何人もの群像が、いろとりどりに描きわけられているのだが、そのなかに、やはりいつも登場してくる人物がいることに気づいた。それは、すらすらとして、背が高く、髪を後ろで束ねた女性で、その三角にとびたした特徴的な髪形で、すぐ同一人物であることが分かった。それはこのひとの母親なのだという。どれもほかの人物よりも、いくぶん丁寧に、しかもこざいかに書きあげられている。

先生の話では、その母親はある事情から、このひとが子供の時分に家を出て、一度も施設には姿を見せたことがないとのことだった。だから、絵に出てくるそのひとは、鮮やかな色彩の洋服を着ていて、いつも若々しく描かれていた。このイメージは、多分このひとの絵では、生涯変わることはないだろうし、幼いときに生き別れたこの幻の母は、このひとの胸のなかで、永遠に若いままで生きつづけていくことだろう。その母も、きっとこの空の下どこかで、娘の身のうえを案じ、想いを馳せていることだろう。

姉ばかりでなく、施設の全員が、途中まで見送ってくれた。そのうちのひとり、別れが辛すぎるらしく、泣きそうな顔して、道端にうずくまってしまった。夕暮れ近い野道を、ゆっくりゆっくり、お互いに別れを惜しみながら歩いた。

やがて、ぼくらの乗り込んだバスは、畑一面のうすくれないのレンゲと、黄一色の菜の花が、見渡す限りひろがっている、晴れ晴れとした早春の暮れなずむ筑紫路を、一路北へ向かって走りはじめた。

